

琉球大学学術リポジトリ

重度障害児に出現するハンドリガードの発達の意味：
ハンドリガードとその後の行動変化の関連性について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): 身体図式, 自他分化, 交替やりとり遊び キーワード (En): 作成者: 普久原, 佳子, 神園, 幸郎, Fukuhara, Yoshiko, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5054

重度障害児に出現するハンドリガードの発達の意味

—ハンドリガードとその後の行動変化の関連性について—

普久原 佳子 神園 幸郎

Developmental Significance of “Hand Regard” on Children
with Severe Mental Retardation
— the Relationship Between “Hand Regard” and Behavioral
Changes after Appearance of “Hand Regard” —

Yoshiko FUKUHARA* Sachiro KAMIZONO**

本研究ではハンドリガード（手の注視）が出現した事例について、本児が通う学校での指導と関連づけてハンドリガード出現前後の行動を追跡し、重度障害児のハンドリガードの発達の意味について考察した。本児に対して筆者は自他の手の同型性意識を換気させて手振りの交替やりとり遊びを指導したところ、やりとり遊びが可能になってしばらくして感覚運動遊びの場面でやや不自由な右手側ハンドリガードが出現した。その後短時間で利き手（右手）が定まるとともに、手伸ばしと把握が分化し社会的協約性のある「ちょうだい」の身振り動作が出現した。「ハンドリガードは内受容感覚と外受容感覚の接合であり身体図式に手を取り入れる始動点である。」とするMerlaeu-Pontyの指摘を本事例は支持し、また重度障害児においてもハンドリガードが出現する原理は乳児と同様であり、その後の行動に影響することを示唆している。

Key words : 身体図式、自他分化、交替やりとり遊び

I. はじめに

筆者は重度障害児と関わる教師としての経験から、Wallonに関心をよせてきた。彼は初期発達を運動的衝動性の段階（新生児期）、情動的段階（6ヵ月頃が中心）、感覚運動的段階（生後1年目の終わり頃から2年目）に分け、情動的段階と感覚運動的段階の中間に交替やりとり遊びの段階があるとしている。Wallon（1983）は交替やりとり遊びについて「この遊びの場面で能動的な相と受動的な相の2つに分解し、役割を交互に演ずることによって、それまで未分化であった自分自身

の感受性の内部に、他者性を感受してゆくのです」と記述している。自他分化や他者性というものが、発達に応じて形成されていくものらしいと筆者は意識させられた。

ところでハンドリガードとは自分の視野に入った手を見る現象のことであり、生後2～4ヵ月に出現し、8ヵ月頃までに消失するといわれている。また「原始行動として生後12日目の乳児にみられる」と報告されている。乳児に出現するハンドリガードの発達の意味についての先行研究はいくつかみられる〈White et al.（1963）、Bower（1979）、Merleau-Ponty（1966）〉。

さて、筆者が養護学校で担当したある重度障害児（以後Kちゃんと記す）は手振りの交替やりとり遊びの指導の流れの延長線上にハンドリガードを出現させている。このことは交替やりとり遊び

*Misaki Special school of Okinawa Prefecture

**Faculty of Education, Univ. of the Ryukyus

を通じて、Kちゃんは他者身体と自己身体の同型性を意識し、他者性を感じ、自他の分化を感じるようになったことを示唆しているようである。その結果個別性に目覚め、身体図式も変化しはじめたものと思われる。すなわち彼女が自発的に言い表出していた手振りの交替やりとり遊びを通じて、自己の手振りの運動から生じる内受容性感覚の増幅が自己の手を見るという行為、つまり内受容性感覚と外受容性感覚の接合を生じさせ、自己の身体図式に手を組み込んでいくことになったのではなかろうか。ハンドリガードは手を自己の身体図式に組み込む始動点になっているのではなかろうか。そこで本研究では、このような仮説の検証を試みてみることにした。

II. 研究の目的

重度障害児のハンドリガードの発達の意味について考える。

1. ハンドリガード出現と交替やりとり遊びの関連性について検討する。
2. ハンドリガードとその後の行動変化との関連性について検討する。
3. ハンドリガードの発達の意味について検討する。
4. 重度障害児のハンドリガードの発達の意味について検討する。

III. 方法

1. 手続き

1) 記録の方法

本研究で対象としたKちゃんの学校での行動の様子を担当開始時より2年2カ月にわたって筆者が文章で記述した。また写真も補足資料として記録した。主として、常態化した行動と新しく出現した行動を記録した。

2) 記録整理の手順

次に下記の観点で記録を分類し、さらにそれらの中から各時期の行動特徴と思われる文章記録と写真を抜粋し整理した。

1 担当開始時の本児の実態とハンドリガード出現までの行動特徴

2 ハンドリガード出現時の行動

3 ハンドリガード出現後の行動特徴

2. 事例について

対象事例は養護学校小学部4年生に在籍する女児である。てんかん（點頭てんかん）、両下肢痙性マヒ（軽度）、知恵遅れの診断を受けて入院中である。筆者は4年時の担任になり、指導開始後に、本児の発達水準を把握するためにミュンヘン機能的発達診断を実施した。この時期は交替やりとり遊びの誘導開始の時期にあたる。その結果認識面ではほぼ7カ月の発達レベルにあるととらえた。Kちゃんの発達水準はWallonの発達段階に従えば交替やりとり遊びの時期にあたり、三項関係成立の視点からはTrevarthenのいう移行期にあたる。

IV. 結果と考察

※後記資料 行動の記録 参照

1) ハンドリガード出現と交替やりとり遊びの関連性について

交替やりとり遊びで反応性がよかった手振りは、もともと本児が快の時一人で行っていた情動表現の動作であった。彼女が手振りを行なった時、筆者も手振りして身体的同型を返すというやり方で交替やりとり遊びを誘導し、やがて筆者と2人で交替やりとり遊びができるようになった。そしてその後しばらくして手振りの模倣動作が出現した。このことはWallonの「子どもは交替やりとり遊びを通じて他者性を感じてゆく。」という指摘を支持しているように思われる。そして、この模倣動作を表出した延長線上にハンドリガードが出現している。このことは自他分化したのとはほぼ同時に、身体図式も変化したことを意味しているように思われる。「他人知覚が変化すれば身体図式も整備される」というMerleau-Pontyの指摘を支持しているように思われる。ハンドリガード出現は交替やりとり遊び誘導によって他人知覚が変化したことに連動して生じた身体図式の変化であり、必然的な現象であったように思われる。

2) ハンドリガードの発達の意味について

ハンドリガードは感覚運動遊びの場面で右手に出現している。少し動かしにくい右手を活動させることが、右手への意識（内受容感覚）を喚起させ、「これは自分の手である」という内受容感覚と視野に入った自分の手を見るという外受容感覚

とが接合したといえるのではないか。ハンドリガードは自己の身体に手を組み込んでいく感覚運動レベルの身体図式の始動点と思われる。従ってハンドリガードが出現する原理についてはKちゃんも乳児も同じであり、Merleau-Pontyの見解を支持しているように思われる。

3) ハンドリガードとその後の行動変化の関連性について

ハンドリガード出現後2ヵ月以内に利き手が出現し、手のばしと把握が分離し、自動運動的な手の使用から意図的な手の使用へと変化していった。その後手振りのやりとり関係を基盤にして、社会協約的な意味をもつ「ちょうだい」の身振り動作を獲得し、彼女は周囲の人との関わりを広げていった。そして物を媒介にしての他者との関わり（原初的三項関係）が成立し、出現1年2ヵ月後には他者の行動を予測し、他者に合わせて自己の行動をとれるようになってきた。また物との関わりも大きな変化を見せ、見る対象としての物が出現している。ハンドリガードはそのあとの行動に影響しているのである。「ハンドリガードは内受容感覚と外受容感覚の対応に慣らすものであり、自己の身体図式に手を組み込んでいく始動点になっているのではないか」という本論文の仮説を本事例は支持しているように思われる。

4) 重度障害児のハンドリガードの発達の意味について

一般に、乳児の場合のハンドリガード出現場面には他者がその出現に役割を果たしているという記述はない。また、物との関わりの中からハンドリガードが出現するという記述もない。ところで、乳児のハンドリガードは3ヵ月頃の母子相互作用（Trevarthenのいう第1次相互主体性）出現の頃に出現している。母子相互作用は交替やりとり遊びを含んでおり、本児のハンドリガード出現経過と共通していて興味深い。乳児はそのような母子との関わりの中かで、自然に自己の身体図式を形成してゆくのである。しかしKちゃんの場合には自己の内受容感覚はあったに違いないが、それが知覚と接合するには他者の積極的な働きかけや物との関わりが必要であった。

V. 今後の展望

ハンドリガードと関連して、「身体的同型性とは何か」について考えさせられた。交替やりとり遊びを誘導する試みの結果、発達初期にあつては自己と他者の身体的同型性を感じとれるようになることが、その後の発達に影響を及ぼすらしいことを感じさせられた。「自分の身体の一部を見る」という、大人にとっては当たり前すぎて気にもとめないことが、彼らには気になるらしいことは、もう大人になってしまった筆者にとっては不思議な現象であった。現在、筆者は自閉症の女の子と関わっている。彼女が自分の鏡像（自分の顔や身体運動、特に自分の口を鏡にうつしている）にこだわっているのを見るにつけ、「その行動の意味は何か」について考えさせられている。「鏡像反応は同型性へのこだわりを示すものであり、自他の鏡像を見ることにより自他の同型性を理解できるのではないか」と筆者は仮説を立てている。もしそうであれば交替やりとり遊びが苦手な自閉症児に鏡像を見せることによって、自他の同型性を感じさせ、その結果交替やりとり遊びを誘導できるのではないかと考えている。乳幼児におけるやりとり遊びの意味づけにおいては、研究者の視点によって母子相互作用、相互主体性、情動調律など表現は違うが、底では共通して母子のやりとりが重視されているように思われる。自閉症はおそらく乳児期あるいは乳児期初期に発症する病気と考えられ、乳児期の発達研究から指導の手がかりを示唆されるであろう。

VI. おわりに

本研究はハンドリガードを出現した事例を遡及的に分析考察したものであるが、この研究を通じて筆者は乳幼児レベルの発達研究には、この時期の身体図式レベルに注目する必要があることを感じさせられた。またそれを引き出す他者の役割の重要性を感じさせられた。これらの視点にたつて、本研究をパイロットスタデーとして、筆者の今後の重度障害児教育の研究に生かしていきたい。（琉球大学教育学部修士論文指導教官 神園 幸郎） 行動の記録

1) 1989年4月担当開始時の本児の実態と、ハンドリガード出現までの行動特徴。

(1) 担当開始時のKちゃんの実態 (1989年4月)

入院中の病院で初対面したのだが、かわいい顔立ちで笑みをうかべているものの、焦点のさだまらないボンヤリした目つきが気になった。担当を開始して驚いたのは10歳の年齢が信じられないような、原始的な未分化な行動が残っていることだった。「Kちゃん、おはよう」などと話しかけると、筆者(以下Tと記す)の口もとを見る感じなので、口をバクバク開閉して見せると、彼女も口をバクバク開閉する。いわゆる共鳴動作である。またTが笑いかけるともらい笑いのように笑いかえす。図1-1に示すように対面して「Kちゃん、かわいいね」などと話しかけると、じっと見つめ、時に答えるかのように喃語を発する。Tが相手にしないと図1-2、図1-3に示すように指しゃぶりが多くなる。

しかし機嫌のよい時は両手首をヒラヒラと上下に振り続ける。笑顔を伴うことが多い。「天候が暑くて不快だ」「お腹がすいた」などという場面ではKちゃんは不機嫌な表情になり、時には泣くこともある。また痙性マヒの影響が運動機能場面に認められる。動かないわけではないが、右側の動きがぎこちない。Kちゃんは独歩できるのだが、図1-4に示すように左右のバランスが悪い為に、斜めの方向に歩いていってしまうので、図1-5に示すように前方から声かけしたり、ガラガラを振って見せたりして、方向修正をするように誘導する。また図1-6～図1-8に示すように斜面を歩く時は左手をあげて転ばないようにバランスをとっている。図1-9に示すように座位も左右非対称でバランスが悪い。だからKちゃんは歩行や粗大運動は苦手な疲れやすく、すこし時間が長

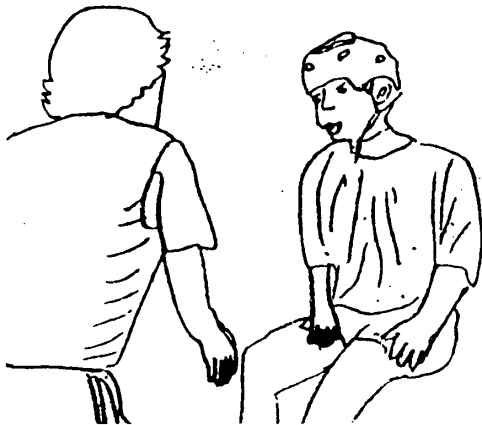


図1-1 Tとの見つめあい



図1-3 座位中の指しゃぶり



図1-2 立位中の指しゃぶり

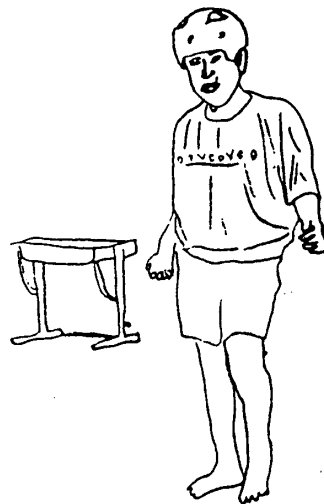


図1-4 立位姿勢



図1-5 前方から歩行誘導



図1-8 斜面の歩行



図1-6 斜面の歩行-1



図1-9 座位姿勢



図1-10 反射的自動運動的な
手伸ばし把握-1

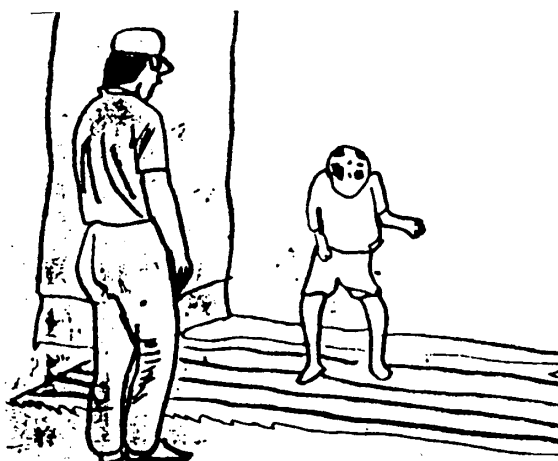


図1-7 斜面の歩行-2



図1-11 反射的自動運動的な
手伸ばし把握-2

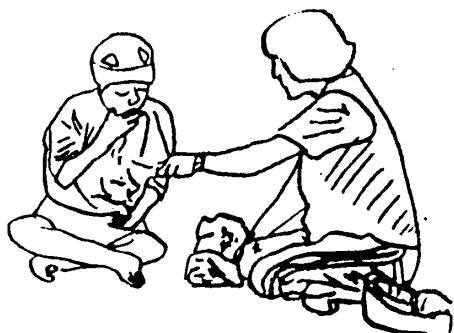


図1-12 反射的自動運動的な
手伸ばし把握-3

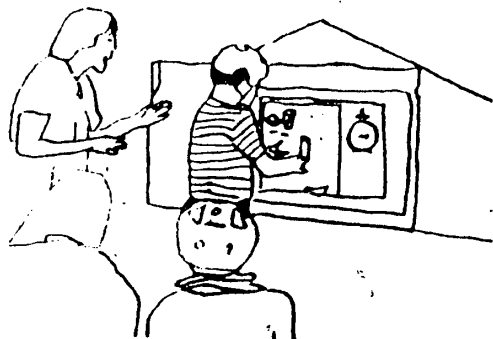


図1-13 両手による自動運動的な
手伸ばし把握

引くと不機嫌になるので、時々休憩しながら行なうことにする。

しかしKちゃんは食べものにはとても関心があり、図1-10～図1-12に示すように見つけると反射的に手伸ばし把握して、即座に口に入れる。あまりのすばやさにあっけにとられてしまう。音の出る紙も好きで、図1-13に示すように両手であつというまに取ってしまう。

また嫌なことをさせられそうになると、Kちゃんは体をつっぱるか脱力するかで「嫌」の意志表示をする。Kちゃんは失禁するが、その前後特に表情、体の動きに変化を見せない。とまどったのは他者であるTが触れるのを嫌がることである。乾布まさつのとき触れると、落ち着かない様子でもぞもぞ動き、じっとしていない。「体に触れてほしくない」という表情をする。音の出るおもちゃに関心があり、紙片やガラガラを耳もとで振っている。この時期の全体的特徴としては、指しゃぶりや紙片を耳もとで振り続ける循環運動が多いこと、Tとの接触を嫌うことがあげられる。このように自己に閉じた行動が多いのに加え、反射的自動運動的な手伸ばし把握、両手使用など手の使い方が未分化な状態にあることである。しかし、共鳴動作、Tとの笑いかわしあい、Tとの見つめあい等々場面は限られているものの、Tの働きかけに身体的同型をかえす反応があり、それは2人が通じ合える可能性を示唆しているように思われた。そこで当分はTとの同席になじませて、さらに同席が快になるように接することにした。

(2) 二人での同席が快になる経験の開始(1989年4月中旬)

そこで彼女に肉声で話しかけたり、歌ったりして、いっしょに音楽をきくことにする。音への反応がよいからである。そうするとよい表情をみせるので、楽しい雰囲気につられて、Tが顔をのぞくと笑いかえす。リラックスした場面では、図1-14に示すように両手をパチパチと拍手している。5月から6月にかけて、少し変化が現れる。4月担当開始時は尿をもらしても気づかない様子だったが、尿がでたら動きが止まり、さえない表情をするようになる。この頃からKちゃんは表情が少し豊かになってきたように見える。排尿した時、驚いたとき、怒ったとき、嬉しい時にはそれなり

の表情を見せるようになる。「山寺のおしょうさん」のリズム遊びをした時は、曲に合わずように声を出す。楽しそうだ。6月には乾布まさつの為にTが触れてもKちゃんは嫌がらず、機嫌がよい表情をするようになってくる。この時期の全体的特徴としては、機嫌のよい状態が増加し、Tからの接触を受容するなど外界からの働きかけを受動し、同調するようになったことである。また指しゃぶり優位の手が拍手を始めたことである。このことは手を叩く—叩かれるという自己身体内での二重感覚、即ち能動—受動の分化あるいは二極化の始まりという点で意味があるように思われる。又、手が口から離れることにより手の活動の様子が変化するばかりでなく、口の活動の様子、目の活動の様子にも変化が現れることが予想される。正中線上で両手を合わせられるようになったことは身体軸の形成にとって意義深いという説もあり、この拍手の出現はある変化の始まりを示唆しているように思われる。



図1-14 拍手

ところで、この時期にはKちゃんはTの働きかけを受動するようになったがTを能動的に志向する動きはあまり見られない。Wallonは子どもが他者性を感受する活動として、交替やりとり遊びをあげているが、本児にも必要であると思われた。そこで「交替やりとり遊びを誘導するにはどうしたらよいだろうか？」がTの課題となってきた。

やりとりと関連して浜田(1986)は「発達初期にあっては二者は身体を介して、同型の相補的に関わりあう。ただし同型性と相補性を区別して表現しているが、これらは概念装置であり、現実の

場でははっきり分離できない」と指摘している。また市川(1992)は「同型的な同調が完全に内面化されると、相補的ないし応答的な同調が可能になる」と述べている。これらは同型的関わりあい相補的関わりあい、やりとりの基本であると指摘しているようである。彼女には共鳴動作、笑いかわしあいなど同型を受けとめる力はあるので、相補的関わりあい、やりとりの誘導は可能性があるように思われた。「Tが彼女が反応する身体的同型を投げかければよいのだ。それも彼女が行なっている動作の中から反応性のよいものを選んで投げかければよいに違いない。」と気づいた。

(3) 交替やりとり遊びの誘導開始(1989年9月上旬～)

この頃になると、他者の口、自分の口を意識しているような活動が増してくる。他の先生から「この頃Kちゃんは話す人の口もとをよく見るようになってきているね」と言われる。Tがどう対応してよいか、とまどう場面も出てくる。Tに冗談っぽく嘸みついたり、後方からつねったり叩いたりして、笑って喜び5、6回繰り返した。機嫌のよいときには口びるをプルプルとふるわせたり、首を左右に振ったり、拍手したりしている。そのような状況は自己身体内部の感受性、内受容覚の活発化を示しているように思われる。もともと彼女は機嫌のよいとき、ひとりでヒラヒラヒラと手振りしていたが、最近はその動きが大きくなっている。これも内受容覚の活発化のあらわれであろう。一方Tを見る目つきもしっかりしてきたので、見つめられたTもKちゃんをじーっと見つめることになり、二人の見る—見られる関係は定着してきた。

そこで交替やりとり遊びの誘導を開始する。彼女が手振りや拍手や喃語のおしゃべりをした時、Tは対面して同型の活動を返すようにする。この3種類を返しているうちに、手振りの反応がよいことに気づいた。彼女が手振りした時、Tも対面して応答するように手振りして返すと、拍手や喃語を返した時よりもずっと喜び、嬉しそうな表情を見せる。それで次は彼女が手振りし、Tが手振りしたあと、他の刺激は入れないで、彼女が再び手振りするのを待つことにする。機嫌がよい時、彼女は手振りするからだ。期待したようにすぐに

は反応は出てこないが、しばらくこの対応をすることにする。しかし、他の行動面で変化が見られる。10月下旬になると、乾布まさつの時私のヒザを叩くようになる。そして図1-15～図1-17に示すように、甘えるように私のヒザに顔をすりよせるようになる。手振りは返ってこないがTの存在を意識しはじめたようである。

4月の担当開始時、「私の体に触れないで」というように緊張して嫌がっていたのがウソのようだ。私を受容してくれたので、とても嬉しい。



図1-17 Tへの愛着-3



図1-15 Tへの愛着-1



図1-16 Tへの愛着-2

この頃Kちゃんはよく歩きまわり、おもちゃ置場の方へよく向かう。排泄面でも変化が見られる。体をくねくねさせるような変な動きをして落ち着かないのでトイレへ連れて行ったらすぐに排泄する。この時期の全体的特徴は外部への志向性が増すと同時に自己内部でも何か変化が起きている可能性がうかがえることである。

(4) 手振りの交替やりとり遊びの出現(1989年11月17日～)

教室で沖縄民謡を聞かせたら、Kちゃんはこのこしながら楽しそうに手振りする。あまり楽しそうなので私もはやすように手振りしたら、彼女も笑いながら再び手振りする。回数は少ないながらも、このようにやりとりが出たのは初めてだ。10月中旬より誘導してきた手振りの交替やりとり遊びが二人でできるようになったのは、担任以来最も嬉しい出来事だ。これまでの自己に閉じこもった状態からぬけ出し始めたような気がする。12月になると、模倣の芽生えを思わせる場面が出てくる。彼女がヒラヒラと手振りした時、Tが真似すると彼女も応じて手振りをくり返す回数が増してくる。他の行動も活発になってくす。KちゃんはTの腕に軽く噛みついてにやりと笑う。Tが「いたーい」と騒いだらまた噛みついてにやりと笑う。この頃から噛みついたら、Tは軽く彼女のヒザを叩き返すようにする。喃語の様子も変わってきて、話しかけると喃語で答える場面が何度も出てくる。「ヨイヨイヨイ」「ガイガイガイ」と言う。Wallonは「交替やりとり遊びは子どもに他者性を受容させる」と述べているが、1月には離れた距離にい

るTの動きを180度追視する。又、乱暴な級友がKちゃんと手をつなごうとしたら、向きを変えて逃げ、Tと手をつなぐ。Tが他の人と話しこんでいたら、KちゃんはTの肩に噛みつく。やきもちのように感じられた。

ところで10月下旬から、すこし動きが鈍いので動作指導しやすいように右手を使用して「ちょうだい」の身振り動作の練習を始めたのだが、どちらを利き手にするのがよいか、思案しているところだ。その為彼女の様子を見ているのだが左右どちらが優位かはっきりしない。

ここで右手使用の「ちょうだい」の身振り動作の練習について記す。これまでに記したように、手振りの交替やりとり遊びの誘導を開始してまもなくの頃から、kちゃんは担任の動きを見、担任の動きに関心を寄せ、2人で手振りして遊べるようになってきた。担任への愛着も示すようになってきた。一方、この頃は運動会練習が続いていて、長時間の歩行や立位が苦手なkちゃんは座って休憩させる配慮が必要であった。そこで休憩させておやつ（えびせん）を食べることにしたのだが、この場面を利用して、食べるときの社会的マナーを教えたいと思いついたのである。図1-10～図1-11に示したように、kちゃんは食べ物を見ると瞬間的に手をのばし、把握して、口に入れ、あっという間に菓子が減ってゆく状態だったからである。彼女は食べ物にとっても関心を示すので、食べ物を手がかりに、「ちょうだい」の身振り動作指導を試みることにした。その為には、彼女がえびせん目がけて手伸ばした時、すぐに動きを止めて、えびせんを把握させないようにしなければならない。しかし、左手は動きがとてすばやくて止められなかったので、動きがすこし鈍い右手で「ちょうだい」の身振りをさせることにした。えびせん目がけて手伸ばした時、「ダメ！」と声かけして、手伸ばした手をおさえて、まず動きを止めて、手伸ばしと把握に間をおくことにした。「『ちょうだい』してよ」と話しかけながら右手の手のひらをひっくり返し「ほーら、えびせんよ」と言いながら、えびせんを手のひらにのせる、という手順をくり返した。最初は怒った表情をしていたkちゃんだが、そうすれば大好きなえびせんがもらえるかわかり、この指導を受け入れるよう

になっていった。やがて手伸ばしする時には、ややちゅうちょした様子でゆっくり行なうようになった。しかし、手のひらをかえさないで、「だめよ、先生を見てね」と言いながら私を見させ、それから手のひらにえびせんがのせられるまで手のひらを見るような場面が出てきた。そうして次の段階では自分で私の方を見て、「ちょうだい」の身振りをして、えびせんが手のひらに乗せられるのを待つようになった。ハンドリガード出現前後は彼女は手振りのやりとりと並行してこの動作をくり返していたのだ。

2) ハンドリガード出現時の行動（1990年1月23日 PM1:20～2:00）

入院している病院よりスクールバスで玄関に到着する。教室に到着してまず授業のウォーミングアップに“ことりのうた”を歌って聞かせる。「ピピピピピ」という歌詞のところで、図2-1に示すようにTが歌いながら手を振ってみせたら、図2-2に示すように彼女も真似るようにタイミングよく笑いながら手を振り、図2-3に示すように微笑む。このような初模倣らしき動きは初めてである。

次にしばらく積み木倒しをやる。

それから床に座って感覚運動遊びをする。Kちゃんはブロックを勢いよく両手でかきまぜるので、ブロックがプラスチック容器からこぼれて床に飛び散り、その中のブロックを拾い、手に持つ。そのうち手に持ったブロックを落としてしまうが、ブロックは見ないで自分の手をじっと見つめる。Tは「今さら何をしているの！」と不思議に思い、近くにいた職員に「次に手を見る場面があったら、写真をとってちょうだい」と合図して、また遊び続ける。図2-4～図2-6に記すようにKちゃんは機嫌よく「アーアー」と言いながら、プラスチック容器を叩いているが、下校時間が近づいたのでTはプラスチック容器をとり去った。その時、Kちゃんは図2-7に記すようにじっと自分の右手を見つめはじめた。

なお、この日は午後の登校バス内でTと並んでシートに座っている時、自分のヒザをポンポン叩き、続いてTのヒザをポンポン叩いている。叩くという行動を自分と他者に連続して行なったのは初めてである。



図2-1 Tの手振り

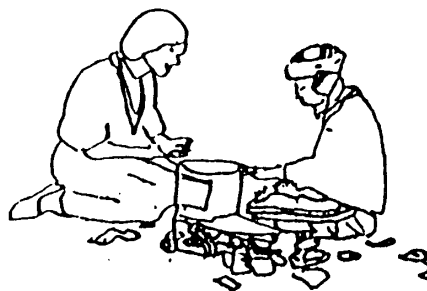


図2-5 感覚運動遊びの場面-2

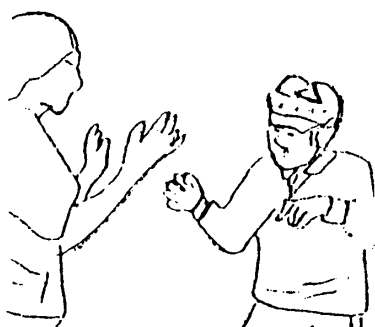


図2-2 Tの手振りの後のKちゃんの手振り



図2-6 感覚運動遊びの場面-3

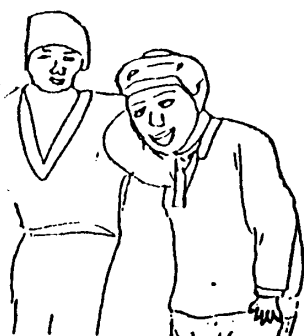


図2-3 Kちゃんの手振り後の微笑み

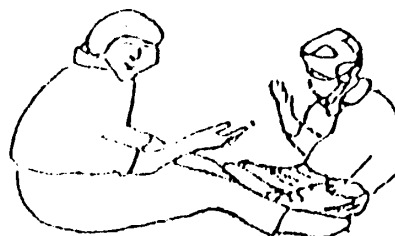


図2-7 ハンドリガード出現

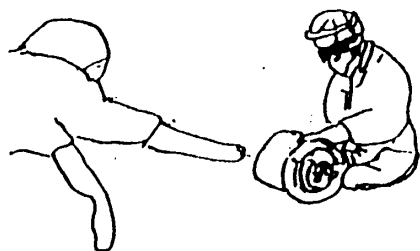


図2-4 感覚運動遊びの場面-1

この日の行動をまとめてみる。この日は手振りの交替やりとり遊びの延長線上で、自分とTのヒザを連続して叩く行動、手振りの模倣、ハンドリガードが一挙に出現している。これらの行動は初出現である。担当開始時には機嫌がよい時の自己に閉じた衝動表現であった手振りが、手振りの交替やりとり遊びを通して自他を感受し、模倣に至ったのは感慨深い。この間毎日手振りをしており、特に9月以降は活動性が増している。交替やりと

り遊びの誘導時にTが「Kちゃんお手々振り振り楽しいね」などと声援しているせいもある。手の活動性が増すにつれ、手に対する内からの感受性すなわち内受容覚は高まっていったに違いない。ブロックやプラスチック容器を使った感覚運動遊びの場面でも手の活動性は以前より増している。両手で激しくプラスチック容器を叩いていた。ところが急にプラスチック容器を取り去られたので両手の動きを止めざるをえなくなり、内受容覚の刺激が抑制されて内受容覚に変化が生じたと思われる。手が動いている感じがなくなったので「今までのようにげんな表情を見せて立ちあがるだろう」と予想した。しかし今日は一瞬おいて、じっと自分の右手を見つめ始めた。両手を見つめたのではなくて、右手を見つめたという点が意義深い。図1-5～図1-9に示したように、Kちゃんは手の動きに左右差があり、活動した際は内受容覚の差（スムーズに動く手とすこし動かしにくい手）を感じていたと推測される。両手の動きを止めざるをえなくなった時、スムーズにはコントロールできない右手を見つめたのであろう。これは手の動きの感覚すなわち内受容覚と目の動きすなわち外受容覚の接合した場面であり、身体図式の変化を示唆している。これまで外受容覚と内受容覚が別々に機能していたが、この時、手を見るという形で接合したのだ。そしてこの現象は手を使った交替やりとり遊びの延長線上に出現している。

Merleau-Pontyによれば「身体図式が整ってくることは、そのまま同時に他人知覚が整ってくることである」「他人知覚が変化すれば身体図式も変化する」と述べている。身体図式の変化を示唆しているKちゃんは今後身体図式や他人知覚の変化が予測できそうだ。

3) 1990年1月23日のハンドリガード出現から1991年3月までの行動記録

(1) ハンドリガード出現後2カ月以内の行動

これから2カ月間は、めざましい変化を見せる。まず食べる場面で、右手を使用するようになる。右手でスプーンを握り、左手で握らせてもすぐに離してしまう。指しゃぶりの時、右手はおや指とひとさし指をしゃぶるが、左手はおや指をしゃぶっている。続いて2月20日には、えびせんを食べる時、図3-1～図3-2に示すようにTの顔を見

て右手で「ちょうだい」の身振りをする。初めての社会的協約性のある身振りだ。諸々の動作は右手で行い、利き手の出現である。物の扱いにも変化が見られる。絵本、紙破り、カセット空容器に関心を示し、カセット空容器で床を叩いたり、振ったりして遊んでいたが、1カ月後には、オルゴール入り球や箱型おもちゃなど、少し大きいおもちゃを床に払い落として遊ぶ。また時に自分が落とした物を拾ったり足元に目につくものが落ちてると拾う。2月下旬現在、やはり指しゃぶりが多いが時々右手をじっと見る。またひとさし指をたてて見ている。おや指とひとさし指を緊張させていることもある。時々自分のヒザを叩く。時々拍手している。このようにkちゃんは自己身体への関心は以前より強くなっているようだ。この頃手伸ばしと把握が分離している。

図3-3はその例である。以前のkちゃんは食べ物には関心があり、見つけると反射的自動的に手伸ばし把握して、即座に口に入れ、あまりのすばやさにあっけにとられてしまっていた。音の出る

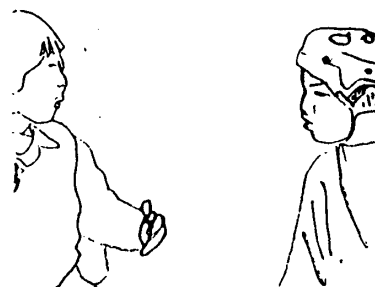


図3-1 「ちょうだい」の身振り動作-1

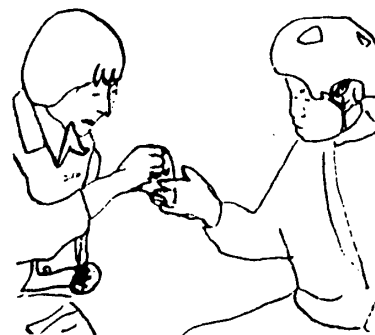


図3-2 「ちょうだい」の身振り動作-2



図3-3 手伸ばしと把握の分離

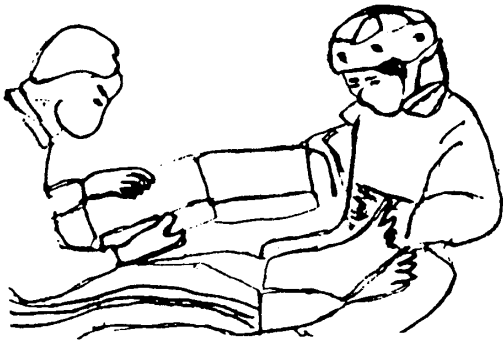


図3-4 絵本の取り合い



図3-5 絵本は自分のもの

紙も好きで、両手であつというまに取ってしまったのがウソのようだ。2月下旬から6月にかけては、物を介して他者と関わる場面が出てくる。オルガンや起きあがりこぼしに触れて音が出た時、kちゃんにはっこり笑ってTの顔を見る。時々瞬間的に見るのだが、初めてのことだ。これまでは音が出ても一人で笑っているだけで、Tに視線を

向けることはなかったので、予期せぬ出来事だった。遊んでいて、輪ゴムを自分の手にまきつけてはじいたので、パチンと手にあたりKちゃんは「痛い」という表情をして、Tの顔を見る。痛さを訴えているようだ。

2月下旬には、図3-4～図3-5に示すようにえびせんの空袋や絵本を他児と取り合うという珍しい行動が現れる。6月には他児が手に持っている物を欲しがりひっぱる。同じ物だが床に置かれている時には手をださない。

「ちょうだい」の身振り動作は7月になると広がりを見せ、えびせんそのものだけでなく、えびせんの入った袋、好きなおもちゃを見ても、時には「ちょうだい」の身振り動作をするようになるこの時期、他者意識がハンドリガード出現前より、かなり明確になってきたように思う。他者の存在を意識するなかで自己身体で外界と関わり、所有欲、共感、意思表示といった自我意識が表出してきたように思われる。

(2) 現前しない物への「ちょうだい」の身振りの出現 (1990年10月2日～)

ここしばらくアンパンマンの模様のついたカンに、えびせんを入れているのだが、このカンを見て寄ってきて、Kちゃんは「ちょうだい」の身振りをする。えびせんを見せてはいないが、なかにえびせんが入っているのを理解している。赤いカバンに入れておくこともあるのだが、そのカバンを見ても「ちょうだい」の身振りをする。特に教えこんではいないが「ちょうだい」の身振りをす



図3-6 T以外の他者への「ちょうだい」の身振り動作-1

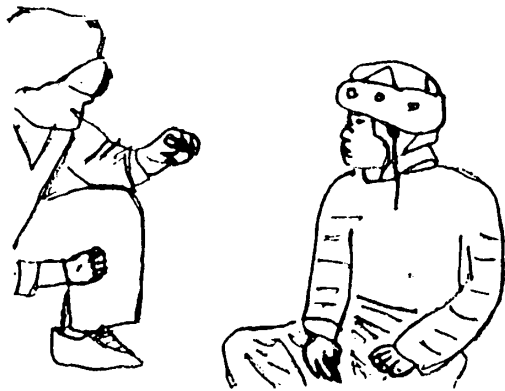


図3-7 T以外の他者への「ちょうだい」の身振り動作-2

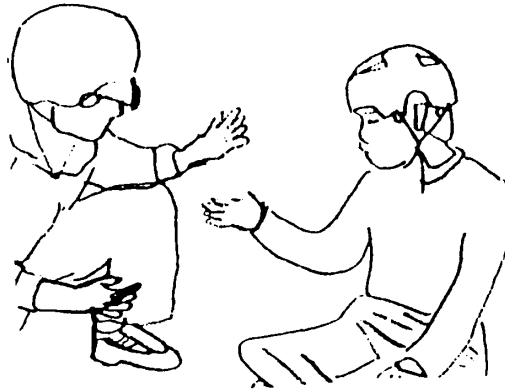


図3-8 T以外の他者への「ちょうだい」の身振り動作-3

るので「Kちゃんはえびせんが見えなくてもなかに入っていると解っているのだ」と気づく。又、図3-6～図3-8に示すようにT以外の先生がえびせんを持っているのを見て「ちょうだい」の身振りをする。「ちょうだい」の身振りは、T以外の先生へ、えびせん以外の物へ、現前でない物へと広がりを見せてくる。「ちょうだい」の身振りを他者一般、物一般に適用し、実用化できるようになったのは驚くばかりの進歩だ。周囲からは「まさかこの子が身振りできるとは思わなかったよ」という感想がきこえてくる。手を意識的に使えるようになったといえよう。

(3) 他者の行動予測出現 (1991年1月下旬)

ハンドリガード出現後半年間の他者との関わりは、意思表示、所有欲、共感といった自我意識を

他者に表出するという新展開を見せたが、この頃になると、他者の行動を予測して、それに応答する行動が出てくる。Tの体をパンパンと叩いたあと、Kちゃんは体をのけぞるようにして顔を上向きにする。お返しにTが彼女の体を叩いたり、抱きつくのを待っている様子である。又、Tがビーチボールを持って投げるポーズをすると、手を広げてかまえる。初めてだ。以前は私の顔を見て笑っているだけだったのに、いつのまにこんな力が育ったのだろうか。図3-9～図3-11に示すように学校の畑で収穫したじゃがいもの山をみつけて、自分でやって来て、右手で握り、左手に持ちかえてじっと見つめる。昨年の今頃はじゃがいもにも無関心で、触れようもしないので、手に持たせてもすぐに指を開いて落としてしまったのだから、大変な変わりようである。



図3-9 じゃがいもへの関心



図3-10 じゃがいもの右手での把握



図3-11 持ちかえてのじゃがいもの凝視

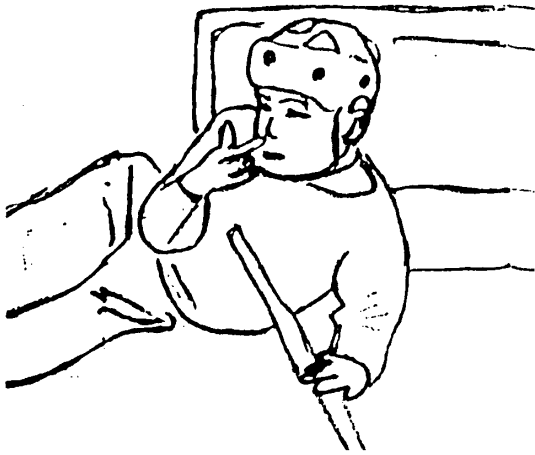


図3-12 ハンドリガードの動き-1

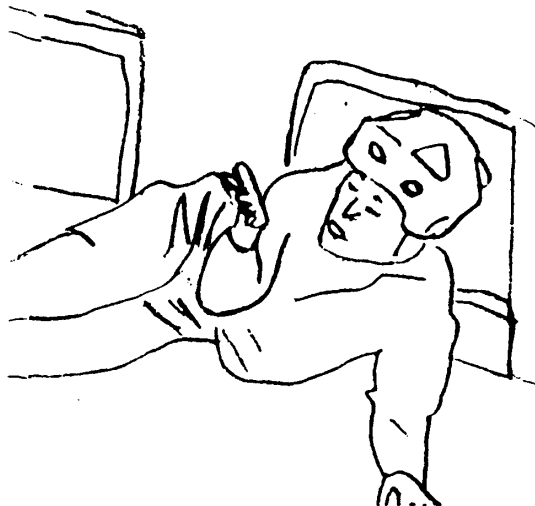


図3-13 ハンドリガードの動き-2

一方この頃になると、ハンドリガードはさらに頻発するようになる(図3-12~図3-4) また絵本を床において眺めている。手の動きは止まっ

ている。振ったり叩いたりするのではなく、見る対象としての物が出現しているのだ。交替やりとり遊びにも明らかに他者を意識した心境がうかがえる。首振りのやりとり遊びの時、Kちゃんは首振りの後、「どうだ」という得意そうな表情でTを見て笑っている。

図3-15に示すようにT以外の先生との手振りのやりとり遊びの時も、手振りしながらその先生を見ている。以前の手振りは、自分の機嫌のよさの表出の為か、手振りのやりとりをしても顔を見る印象はなかったのに比べると明確な変化を見せている。

最後に手叩きのやりとりについて記す。「Kちゃん」と呼名してTが手をさしだすとKちゃんはTの手をパンパンと叩いて応じるようになってきた。担任開始時始めは笑っているだけだったので、他者とのコミュニケーションに手を意図的に使えるようになったことを痛感させられる。

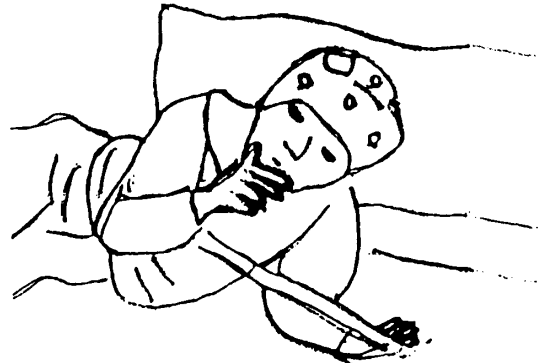


図3-14 ハンドリガードの動き-3

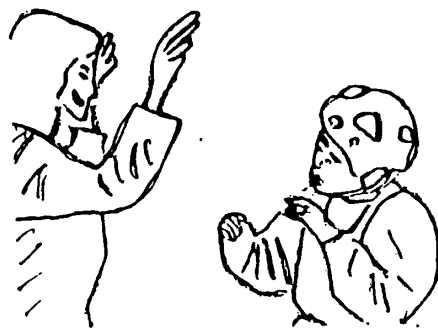


図3-15 T以外の先生との手振りのやりとり

※ハンドリガードが頻発した頃の特徴

ハンドリガード出現の頃は散発的で時々じっと手の平を見ていたが、ころ頃は指のポーズをかえたり、ひねったりして動かすようになった。

参考文献

- 麻生 武 (1988) 模倣と自己と他者の身体、認識とことばの発達心理学、ミネルヴァ書房 37-60.
- Trevarthen C (1979) 早期乳幼児における母子間のコミュニケーションと協応：第1次相互主体性について、母と子のあいだ、鯨岡峻 (編訳)、鯨岡和子 (訳)、ミネルヴァ書房、69-101.
- Trevarthen C & Hubley (1979) 第2次相互主体性の成り立ち、母と子のあいだ、鯨岡峻 (編訳)、鯨岡和子 (訳)、ミネルヴァ書房、102-162.
- Stern D.N (1985) 幼児の対人世界 理論編、小此木啓吾 (共訳)、岩崎学術出版社、146-189.
- 浜田寿美男 (訳) (1983) 身体・自我・社会、ミネルヴァ書房、23-31、138-207.
- 浜田寿美男 (1986) ワロン. H、別冊発達4、ミネルヴァ書房、59-104.
- 浜田寿美男 (1986) 自我形成論間身体性についてー同型性と相補性ー、発達25、<子どもの生活世界>研究会、ミネルヴァ書房、102-113.
- 浜田寿美男 (編) (1992) 「私」というものとなりたち、ミネルヴァ書房、4-80.
- 市川 浩 (1995) 精神としての身体、講談社、181-183
- 浜田寿美男 (1994) ピアジェとワロン、ミネルヴァ書房、154-202.
- 市川 浩 (1995) 精神としての身体、講談社、181-183.
- 柏木 恵子 (1983) こどもの「自己」の発達、東京大学出版会、14-41.
- Merlaeau Ponty (1996) 幼児の対人関係、目と精神、滝浦志静雄・木田元 (訳)、みすず書房、128-146.
- 中田 基昭 (1984) 重症心身障害児の教育方法、東京大学出版会、289-334.
- 野村 庄吾 (1980) 乳幼児の世界、岩波書店、46-59.
- Bower T.G.R (1979) 乳児の世界、岡本夏木 (共訳)、ミネルヴァ書房、126-189.
- テオドール. ヘルブルッケ J. ヘルマン. フォン. ビムプエン (1977)、村地俊 (監訳) 赤ちゃんの発達、同朋舎、15-35.
- 谷村 覚 (1994) 自我の対話構造、ーワロンの自我発達論ー、自己意識心理学への招待、梶田叡一 (編)、有 閣、148-170.
- 山田 俊郎 (1984) 自分の手はなぜ自分の手か?、発達18、ミネルヴァ書房、104-111.
- 矢野 喜夫 (1996) 「もう1人の私」と自我発達、発達65、ミネルヴァ書房、1-6.